

戦地から入本郷に届いた手紙



▲ 栗名正五郎宛の手紙（栗名誠家所蔵）

入本郷区いりほんごうの栗名家くわなから、直径15センチにも及び巻物をお預かりしました。これは旧八里村やさとむら（緒川地域）の村長を務めた栗名正五郎のもとに戦地から送られてきた手紙を貼り合わせたもので、その数は120通にのびります。満洲やロシア北東部の最前線で従軍する兵士たちの声がつづられていました。

◇ 日露戦争の戦地から

日清戦争後、その勝利により得た遼東半島を三国干渉で放棄した日本に対し、ロシアは韓国や満洲（中国東北部）へ進出します。日本はこの動きに対抗するためイギリスと同盟を結び（日英同盟）、ロシアとの交渉に臨みますが決裂。明治37年（1904）2月日本軍は韓国北西部の仁川に上陸、仁川・旅順港のロシア艦隊を攻撃して日露戦争が開戦し、翌年9月にアメリカ大統領ルーズベルトのあっせんで講和条約調印に至るまで1年半にわたり続きました。

茨城県出身の兵士の多くは、本県を管轄する歩兵第二聯隊れんたい（営所は佐倉、明治42年3月以後は水戸）に所属していました。二聯隊は明治37年3月に日露戦争の動員令を受け、朝鮮半島北西部から上陸を開始、年末には旅順を攻略し、翌年3月には奉天（現瀋陽）会戦に従軍しこれを占領しました。

栗名正五郎は明治34年4月14日に八里村長に就任（57歳頃）、4年間の任期を務めました。武道を好み、特に撃剣術を修め、自宅に武道場「那珂弘武館」を設けて近隣の者に武道を教授しました。出征兵士の中にはこの道場の出身者もいました。栗名はこれらの手紙を巻物状に貼り合わせて、包紙に巻いて保管していました。包紙には「明治三十七年日露戦役軍人実戦場ヨリ御贈与之御書翰及大正八年度出征軍人是亦真戦場ヨリ御贈与之書状類謹テ集巻ス」と墨書されています。

手紙の差出人は、近衛師団に配属された孫の佐市、

甥などの親族や村内から出征した兵士らのべ45人にのびります。手紙の内容は村からの慰問状の礼や村に残してきた家族の世話を依頼するものが目立ちますが、戦況についての記述も多く、日本郵船の貨客船常陸丸の撃沈（明治37年6月）や、台湾海峡を通過するバルチック艦隊監視のための「両眼鏡」（双眼鏡）徴発の依頼など、様々な内容が見られます。

◇ シベリア出兵と尼港事件

後半の10通ほどは大正8年のシベリア出兵に関する書簡が含まれています。

シベリア出兵はロシア革命（1917）後のロシアへの干渉戦争で、日本は居留民保護の名目で7万を超える兵を派遣しました。このさなか、大正9年（1920）3月に黒竜江河口の都市ニコラエフスク（尼港）に駐屯する歩兵第二聯隊第三大隊第十一・十二中隊と居留民がロシアのパルチザン軍と衝突し、5月には捕虜となった130人余が殺害されるという事件が起きました（尼港事件）。世論の沸騰を受けて翌年日本は北サハリンを占領することになります。

栗名への手紙には、3人の兵士がハバロフスクやニコラエフスクから出したものも含まれています。尼港事件以前の手紙には現地の平穏な日常が綴られていますが、事件後、ハバロフスクの警備隊として配属された兵士からの大正9年6月の手紙では、戦闘で被害を受けたハバロフスク市街の悲惨な状況などとともに、尼港事件について「第三大隊本部、十一、十二の各中隊は生残者ただ只の一人も無之由」と記されています。八里村出身の歩兵軍曹と歩兵上等兵各1人が尼港事件で命を落としました。



栗名司郎さん、吉澤茂さんに調査にご協力いただきました。
【参考文献】水戸歩兵第二聯隊史刊行会編『水戸歩兵第二聯隊史』昭和63年、『八里村郷土誌』昭和31年、麻田雅文『シベリア出兵』中公文庫 2016年、宇野俊一『日清・日露』小学館 1976年